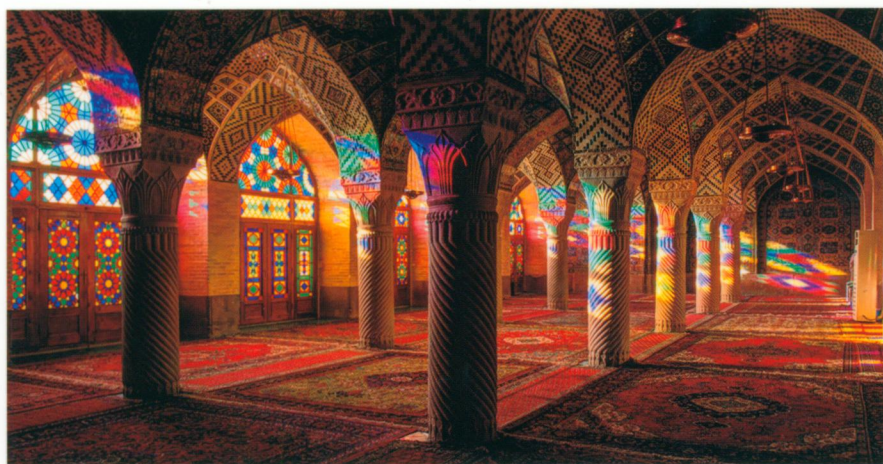


井筒俊彦の比較哲学

— 神的なものと社会的なものとの争い —

バフマン・ザキプール 著



Toshihiko Izutsu's Comparative Philosophy

A Conflict between the Social and the Divine

by

Bahman ZAKIPOUR

知泉書館

ISBN978-4-86285-291-5

C3010 ¥5300E

定価（本体 5,300 円＋税）



9784862852915



1923010053004

井筒は10年に及ぶイラン滞在中に、12イマーム・シーア派世界のヒクマ哲学とイルファーン神智学の研究に従事、それらを融合・発展させ、12イマーム・シーア派神学の煩瑣哲学の問題を現代に適合させ、独自の業績をあげて尊敬された。1979年のイラン・イスラーム革命を機に帰国し「東洋思想」の研究に着手したが、イランでは帰国後の井筒の活動は知られていない。本書は井筒の学問に傾倒した著者が、来日して井筒の比較哲学の研究に没頭した成果である。著者はフォーコーの「知と権力の関係」やサイドの「オリエンタリズム」の考えを踏まえ、井筒の比較哲学を考察する。第Ⅰ部はトインビーの文明論やマッソン=ウルセルの比較哲学を通して、比較哲学の必要性和政治的・社会的現実との連動関係を分析する。第Ⅱ部では、井筒に影響を与えたアンリ・コルバンの思想を検討し、井筒の比較思想の意義を解明する。第Ⅲ部は井筒とコルバンにおける比較哲学の政治的・社会的次元と認識論の問題を考察するため、オリエンタリズムと「反対のオリエンタリズム」の意味を検討、イラン革命と井筒の比較哲学との関連にも言及する。わが国では現象学や言語学、日本文化、イスラーム学などから井筒哲学が研究されてきたが、本書は比較哲学の背後で働く社会的・政治的事象との関連で井筒比較哲学を読み直した意欲的な業績である。



井筒俊彦の比較哲学

— 神的なものと社会的なものとの争い —

バフマン・ザキプール 著



知泉書館

目 次

序文	松本 耿郎	v
まえがき		xiii
序 論		3
第1節 本書の主題		3
第2節 近年の井筒理解の傾向と問題		5
第3節 本書の構成		8
第4節 井筒の形而上学を構成する問題系		9

第 I 部

比較哲学の本質とそれがもたらす結果

第1章 比較哲学の目的と義務		23
第2章 比較哲学の必然性と政治的・社会的基盤——比較哲学の本質		31
第1節 前近代における比較哲学		31
第2節 近代における比較哲学		44
第3章 比較哲学に対する批判——比較哲学のもたらす結果		57
第1節 学問的な批判		57
第2節 政治的・社会的な批判		59

第 I 部の結び	61
----------	----

第 II 部

井筒比較哲学の意義

—— 神的なものをめぐって ——

第 4 章 「歴史を超える対話」への根拠	69
第 1 節 第一の根拠	69
第 2 節 第二の根拠	78
第 3 節 第三の根拠	85
第 5 章 井筒の歴史的方法論	87
第 1 節 初期の『コーラン』研究	89
第 2 節 『意味の構造』の方法論	91
第 3 節 井筒の方法論重要性	98
第 6 章 マッソン＝ウルセルの比較哲学と井筒の方法論	101
第 1 節 マギル大学での出会い	101
第 2 節 『スーフイズムとタオイズム』の論点	104
第 3 節 イスラーム哲学における「存在」の分別	104
第 4 節 『スーフイズムとタオイズム』執筆の動機	106
第 5 節 イスラーム哲学における「存在」の概念	108
第 6 節 神秘哲学における「存在」	111
第 7 節 井筒の比較哲学とマッソン＝ウルセル	115
第 7 章 「歴史を超える対話」とは何か——アンリ・コルバンの比較 哲学と井筒の方法論	123
第 1 節 スフラワルディー哲学と「歴史を超える対話」	125
第 2 節 M 領域に至る方法論としての「隠されたるものの開示」	138

第Ⅱ部の結び	160
--------	-----

第Ⅲ部

神的なもの和社会的なものの争い

——超歴史における伝統を探求して——

第8章 井筒と政治	165
第1節 個人的な特性	165
第2節 その思想の構造	169
第3節 日本人研究者の見解	169
第4節 イスラーム改革主義者との関係	171
第9章 イスラーム改革主義者との関係	173
第1節 井筒のアラビア語教師たちの影響	173
第2節 井筒とイランの知識人、シーア派ウラマーとの関係	191
第10章 反対のオリエンタリズム——井筒比較哲学と世俗主義	197
第1節 哲学者の政治的アプローチ	198
第2節 比較哲学の政治性に関する先行研究	199
第3節 オリエンタリズムと反対のオリエンタリズム	202
第11章 伝統復興と反対のオリエンタリズム	217
第1節 ナスル、井筒、コルバン——イラン王立哲学アカデミー	222
第2節 シャイガン、井筒、コルバン——イラン文化の対話研究所	227
第12章 イラン革命と井筒比較哲学——その認識論的な問題と帰結	235
第1節 井筒とコルバンの比較哲学における他者化	235
第2節 伝統と革命	241

第Ⅲ部の結び	262
結 語	265
謝 辞	271
引用・参考文献表	273
付録（資料，写真，書簡）	281
索 引	299
英文要旨	303

井筒俊彦の比較哲学

——神的なものと社会的なものの争い——

序 論

第1節 本書の主題

本書は、井筒俊彦の人生、あるいは井筒とイスラームとの関係に関する研究ではない。前者については2011年に若松英輔が書いた『井筒俊彦——叡知の哲学』に付け加えることはなく、後者については2012年に出版された『井筒俊彦とイスラーム』（坂本勉・松原秀一編）が十全に描き出している。それゆえ、本研究は井筒の比較哲学を成り立たせている政治的な構造を明らかにすることを主題とする。

本書の中心的課題は、井筒の比較哲学と政治的・社会的な事柄との関係である。言い換えれば、本書の目的は井筒に関する現象学的・言語学的・イスラーム学的な従来の研究とは違う枠組みを提供することである。だがそのことは、本書が井筒の現象学、言語学、イスラーム学を扱わないことを意味しない。むしろ筆者は、それらのアプローチからとらえられた従来の井筒像や井筒の哲学的な営みを、新しい枠組みで読み直したいと考えており、それが主要な関心である。つまり、従来の井筒理解の基礎となる枠組みがどのようなものであり、いかに意義づけられているかを踏まえたうえで、その井筒理解が構造的に隠すことになる位相に光を当てようとするものである。

その意味で、これまで意識的にせよ無意識的にせよ言及されることのなかった位相を明らかにすることが本書の課題である。いうなれば、この新しい枠組みは、井筒の比較哲学に関する政治的・社会的文脈を形成する物語でもある。筆者の理解する限りでは、井筒の比較哲学はその裏面に、ある種の強い政治的・社会的アプローチを隠し持っている。そ

のことを、井筒は直接に言及することはない。しかし、これはより広いパースペクティブにおいて井筒の営みを条件づける、井筒の裏返された政治的・社会的アプローチ、隠された枠組みや条件づけともなっている。この政治的・社会的アプローチは、理論的観点からも、そこから派生した帰結の観点からも、井筒の比較哲学のあらゆる次元に現れると考えられる。

井筒が「比較哲学」あるいは「東洋哲学」と呼ぶものは、実際に、東洋人のアイデンティティー、西洋の歴史的支配、東西の関係、伝統とモダニティーの関係など多様な問題を含んでおり、井筒の希望、懸念、夢、保守性、社会的・政治的な状態と密接な関係がある。このような指摘は、井筒の比較哲学の本質を政治的・社会的なものへと無理に還元したものと理解されるかもしれない。しかし、もしわれわれが、あらゆる形而上学の体系や比較哲学の学派は、政治的・社会的状況に連動していると認めるなら、井筒の比較哲学を政治的・社会的観点から評価することも決して牽強附会の理解ではないはずである。

以上のような関心から、ミシェル・フーコー (Michel Foucault : 1926-84) の「知と権力の関係」とそれを支持するエドワード・サイード (Edward Said : 1935-2003) の「オリエンタリズム」の考えに基づいて、「支配の言説」と「知と権力の関係」を広義に捉えることにより、井筒の比較哲学の観点から考察することを試みる。この試みを順序立って提示すべく、第I部で井筒の比較哲学の構造について詳しく論じてから、歴史的に具体例を取り上げ、井筒の比較哲学における「支配の言説」と「知と権力の関係」に関して多角的に論じる。その歴史的な事例とは1979年に起きた「イラン革命」である。このように、本書で扱う対象は純粋な哲学を超え、社会・政治・歴史・オリエンタリズムのようなものも含んでいる。

この中心課題に加え、派生的な課題をも合わせて考察する。それは井筒哲学を研究するイラン人研究者と日本人研究者との橋渡しをするという課題である。井筒は約10年間イランに住み、近代イラン思想から影響を受け、逆に近現代イラン思想にも影響を与えた。それゆえ、イランの側からの井筒理解を提示することで、井筒哲学のより正確な理解と井筒像を多角的に視るパースペクティブを日本の側に提供できるであろう。

う。そのために、イラン人研究者と日本人研究者の意見を対照的に論じるようにした。これによって、本書自体も、イランと日本のひとつの比較哲学になると考える。

第2節 近年の井筒理解の傾向と問題

2014年は井筒俊彦の生誕100年にあたった。そこで2011年前後から井筒の出身大学である慶應義塾大学は、様々なプロジェクトを開始した。若松英輔『井筒俊彦——叡知の哲学』（2011年）、坂本勉・松原秀一編『井筒俊彦とイスラーム』（2012年）、安藤礼二・若松英輔編『井筒俊彦——言語の根源と哲学の発生』（2014年）、井筒俊彦全集の刊行、井筒俊彦英文著作翻訳コレクションなどが、慶應義塾大学の主導あるいは日本人研究者のプロジェクトとして次々と刊行された。さらに2018年に慶應義塾大学の教授である斎藤慶典は『「東洋」哲学の根本問題 あるいは井筒俊彦』（講談社）を刊行している。

慶應義塾大学に加え、東洋大学国際哲学研究センター（第3ユニット）も2012年から2016年まで「共生の哲学に向けて——イラン・イスラームとの対話」というプロジェクト名の下に、イラン人の学者たちとともに、4回のシンポジウムを開催した。それらのシンポジウムの中心テーマは日本思想とイラン・イスラーム思想との対話であった。それらのシンポジウムの中心軸は井筒の比較哲学あるいは東洋哲学の読み直しであった。提出された論文のうち、永井晋「東洋哲学とは何か——西田幾多郎と現代日本思想」、小野純一「井筒哲学における言語論の問題と意義」、エサン・シャリーアティー（Ehsan Shariati；1959-）「現代の『イラン的イスラーム』哲学におけるコルバンと井筒の役割に関する導入的比較研究——ハイデガーからマシニョンまで」、ナスロッラー・プールジャヴァーデー（Nasrollah Pourjavadi；1943-）「井筒俊彦のイラン神秘主義哲学に対する関心」、竹下正孝「イスラーム学者としての井筒俊彦」は、具体的に井筒の思想について論じたものであった。

2011年前後から開始された慶應義塾大学や東洋大学のプロジェクトに先立ち、2004年に発表された次の二つの論文は、井筒の母国で井筒

の思索を初めて本格的な哲学的考察対象にした画期的な研究ということができるであろう。一つは、井筒の哲学の本質に関して論じる新田義弘「知の自証性と世界の開現性——西田と井筒」である。これは、西田との比較により井筒を日本思想史に位置づけるというよりも、二人の「日本的」哲学の意義を現象学から問い直すものである。もう一つは永井晋「イマジナルの現象学」である。これは、井筒が依拠した思想家の一人アンリ・コルバンが提唱した「イマジナルなもの」の現象学的意義に光を当てること、井筒のイスラーム思想理解の前提とその可能性を、著者独自の現象学的立場から明らかにしようとした独創的な研究である。このように両者の研究は、もっぱら哲学に限定したものである。2009年には『三田文学』(96号)が井筒について特集号を出し、おもに『意識と本質』を中心に井筒の哲学について論じた。

このように、近年陸続と著された研究動向の特徴は、これらのほとんどの著作が、井筒の哲学を現象学、言語学、日本文化、イスラーム学の観点から探究して読み直しているという点にある。さらに第Ⅲ部で詳しく論じるが、大部分の日本人研究者にとって、井筒の東洋哲学(比較哲学)は政治的・社会的な事柄と関係しないものとして扱われている。少なくとも、その方面から井筒哲学を再構築しようという試みも、そのアスペクトから井筒哲学の前提や遺産を明確にしようとしたものもない¹⁾。このような欠如は、結果的に、井筒哲学を一定方向に限定してしまうこととなり、別の方向の可能性を消極的ながら否定することになるかもしれない。控えめに言うなら、井筒の比較哲学を意味論的、現象学的(あるいは哲学的)なものとして理解しなければならないというバイアスが無意識のうちにかけられている可能性を指摘できるのではないだろうか。

とはいえ、一部の日本人研究者が、井筒の比較哲学と政治的・社会的な事柄の間にある種の間接的な関係を見出すことができなかつたわけでも、避け

1) しかし、2016年6月に筆者が本書の元となる博士論文を準備していた時に、三浦雅士の「言語の政治学」という論文が掲載された(『群像』2016年7月号)。三浦論文のアプローチは批評的なものであり、政治学の観点から井筒の哲学を探究する。しかしそれにもかかわらず、三浦の批評は主に井筒哲学と日本文化の関係に関して論じており、そのアプローチは本書の目的とは違う。三浦論文を紹介し、そのコピーを提供してくれた、前日本文藝家協会理事長である坂上弘先生に記して謝意を表す。

てきたわけでもないことを示す例はある。ただしその場合でも、彼らの研究は、具体的には井筒と大川周明（1886-1957）との協力関係というテーマに限られている。大川の思想史的意義との関係で井筒の哲学的問題に踏み込むというものではない。第Ⅲ部でこのことについても詳しく論じる。

上に例として挙げた研究に加え、日本人研究者によって、井筒とイラン革命、またイランの知識人、シーア派ウラマーとの関係についても、いくぶんか論じられることはあった。しかし、それらの研究は、残念ながら、限定的であり、精確で包括的とはいえない。例えば、若松英輔は、日本語で書かれた井筒についての最初の評伝的概説書『井筒俊彦——叡知の哲学』の中で、ホセイン・ナスル（Seyyed Hosein Nasr；1933-）やメヘディー・モハッゲグというイラン人学者の影響や役割に関して論じている。だが、井筒の思想を語るうえで欠くことのできない、哲学者でありインド学者であるイランの知識人ダルユシュ・シャイガンの「文明の対話」というプロジェクトや、彼と井筒との関係に関しては、いまだ考察の外に置かれている。あるいは、坂本勉は『井筒俊彦とイスラーム』で、多かれ少なかれ井筒とイラン革命およびイスラームの政治的運動の関連について論じる。しかし、井筒の哲学を裏返された政治的・社会的な哲学として提示することはない。

こうした研究状況において、筆者はただ、語られない別の領域を明らかにすることで、語られてきた領域に、いわば厚みのある多角的で立体的なイメージを与えようとするだけではない。井筒を論じる著者たちが一様に認めるように、確かに、井筒は日常的に具体化される様々な現象を根底から支える絶対者に着目し、その非実体的現れが様々な東洋思想でどのように議論されてきたかをまとめ、新たな哲学を作ろうとしていた。だが、この絶対的なものは、井筒にとっては、日常的次元から完全に切り離された抽象的なものではない。このことも、多くの論者は認めている。ということは、日常の、卑近な、世俗の、あるいは社会的・政治的出来事と密接に結びついているはずである。というよりも、そのようなものとして現れるのが絶対者の本来の姿であるのだから、そのような経験的現象と絶対的なものとは、差異を示しながらも同一ということになる。

言い換えれば、井筒の求める哲学的態度は、このような経験的現象を個的に存立する実体として対象化することを問題視し、すべては絶対的なものが非実体的に自己を示すものと見なす。この考え方は、一種の形而上学といえる。なぜなら、個々の日常的、具体的、歴史的な現象の基礎に、絶対的な働きをみるのであるから。しかし、その絶対的なものが経験世界と同一であるなら、この考え方自体が歴史的現実から乖離してとらえることは、その趣旨に反することになりえないだろうか。実際、井筒の哲学的企図は、井筒を取り巻く政治的・社会的環境や状況からの制約をきっかけとして成立する、あるいは形成されていくことを、本書は示そうとする。さらに、井筒が見出した絶対者と特殊者・相対者との関係は、再び、日常の、卑近な、世俗の、あるいは社会的・政治的な出来事に密接に転化していく。井筒哲学が成立した後の、井筒哲学に基づく社会的・政治的な出来事と井筒哲学は関係しないという主張は、成り立たないであろう。そのような出来事の出来る仕方、意義づけ、帰結を、追究していこうと考える。

第3節 本書の構成

ここで、本書の議論の流れを示しておきたい。まず、第I部では、具体的に比較哲学と政治的・社会的状況との関係について論じ、様々な例をとおしてそれらの間の連動関係を論じる。そして、第II部で井筒の比較哲学の本質と基本構造の分析を試みる。さらにこの分析を踏まえて、第III部では井筒の比較哲学の政治的・社会的な諸次元を解説し、その認識論的問題を示す。井筒の思想は、本書の中心テーマであるが、筆者は自分の意見と見方を表現するために、それぞれの部の中で、一つの理論の見通しを採用しながらそれに基づいて考察する。

さらに、各部の内容を示しておこう。

第I部は、比較哲学の必要性と、比較哲学と政治的・社会的出来事との関係を解説するために、文明に関するトインビーの見解と比較哲学に関するマッソン＝ウルセル (Paul Masson-Oursel : 1882-1956) の見解を主として検討する。

第Ⅱ部では、井筒に加え、アンリ・コルバンの思想について詳しく論じる。第4章と第7章で論じるように、コルバンの思想は、井筒の比較哲学に非常に影響を与えている。井筒の思想について理解を深めるためにも、コルバンの思想の説明は不可欠である。なお、本書「付録」では、コルバンと井筒の往復書簡、イラン王立哲学アカデミーに関する資料を初めて公刊する。これらは極めて資料的価値の高いものである。

第Ⅲ部は、井筒とコルバンの比較哲学の政治的・社会的な次元と認識論的問題を考察するために、既述のようにエドワード・サイードのオリエンタリズム理論と、サイードの批判者であるシリア人哲学者サーディク・ジャラルール・アル＝アズム (Sadik[q] Jalal al-Azm; 1934-) の「反対のオリエンタリズム」(Orientalism in Reverse, or, Reverse Orientalism) を理論的背景として活用する。さらに、井筒の比較哲学をイラン革命の流れに関連づけ、イラン革命の状況の中での井筒の比較哲学とその認識論的問題を解説する。

第4節 井筒の形而上学を構成する問題系

筆者は、あらゆる形而上学の体系は、政治的・社会的な状況と連動する、あるいは制約を受けざるをえないと考える。哲学者は、特定の時代に生き、その時代と場所の具体的な問題を考察しながら、普遍的な次元で思索する。しかし、その思索が社会から乖離してしまえば、生きた哲学とは言えない。その哲学は、具体的な問題を考察することから成り立って、また具体的な社会へと再び関わっていくべきものであるはずだ。

そこで、井筒の比較哲学をめぐり、井筒本人によって直接に言及されていない、もしくはほのめかされたままに終わっている政治的・社会的な性格や基盤、背景、成立条件を描き出すにあたり、井筒自身が、井筒哲学の中心に据えていると考えられる項目を整理しておく必要があるだろう。すなわち、これまでの井筒理解が、主として取り上げてきた井筒哲学の性格を規定するもの、井筒哲学を形而上学体系として考えた場合、その体系を作り上げる主要な構成要素となる問題系をここで整理し

ておく。なぜなら、これらを本書は、井筒の隠された政治的・社会的アプローチとして読み替えていくからである。あるいは、その形而上学的問題系が、どのように社会と関わり合うかを考察する、というのが本書の目的だからである。

したがって、井筒哲学の形而上学的側面を構成する問題系は、本書全体に伏在する前提として関係しているが、直接にその形而上学自体を検討するものではない。それゆえ、まずここで一括して検討しておくことが、叙述を進めるにあたって、効果的であると考えられる。井筒哲学の形而上学的側面を規定する問題系は、以下の四つにまとめられるだろう。

(1) 「絶対者」「絶対無分節」「一なるもの」

井筒は、彼の哲学的思惟の極点として、「絶対者」「絶対無分節」「一なるもの」を措定している。井筒にとって、これは、存在と意識のゼロ・ポイントともいわれるように、主体や客体という分裂が生じる体験そのもののことといえるだろう。これは、意識の志向性が働いておらず、存在が顕現していない状態である。体験自体が意識による反省や分析を受けていないため、意識と存在が分裂していない（ゼロ・ポイント）事態である。

井筒の関心は、この窮極的で絶対的な事態が、いかに存在の自己顕現として圧倒的に多様な存在者の多様性を生み出すかにある。つまり、この圧倒的な多様性がどのようにして生じるのかという問題である。多様性の起源、多性の生起は「一なるもの」であって、この自己顕現という事態は絶対者と現れの間接的な関係をあらわすものではない。すでに、現れの段階にある「一なるもの」が「絶対無分節なもの」であって、これが自己を分節すると、井筒は考えていると思われる。

この分節は基本的には人間の言語によって生じるとするのが、井筒の考えである。井筒は、人間の知覚に固有の生物学的段階での多性の知覚に加えて、歴史的相対論を成立させる文化的多性へと多様化していくことを「分節」として考察する。そうだとすると、この意味での分節においては、分節という多様化は、絶対者の自己顕現によるのではないと言わざるを得ない。そうではなく、言語的な分節が多様性をもたらしていることになるのではないだろうか。このような理解が可能であるなら、

絶対者の自己顕現というのは、歴史的に相対的である言語によってしか現実化しない事態である。顕現を言語的分節として理解した場合、言語が歴史的であり相対的である以上、絶対者の自己顕現をめぐる議論は、否応なく、具体的な社会的現実をめぐる問題として成立することになる。ここに、絶対者の自己顕現をめぐる社会的側面の必然的で本質的な根拠がある。

加えて、ここには、宗教的信仰心とは無関係なイデオロギー成立の根拠にも転じうる問題が成立しているのだ。というのも、分節した現実が成立しているという認識は、分節するものと分節されるものの区分が出現し、この区分に基づいて、分節される以前という措定を理論的に導き出す。これが意味するのは、絶対無分節は、理論的措定として思考はできるが現実的体験からは逃れてしまう、いわば仮想ということになる、という事態である。人間が現実の外に出られない以上は、絶対無分節については際限なく絶対無分節について語り続けるだけであり、絶対無分節はどこまで行っても到達できないからである。この際限のなさ、一方では宗教的信仰心と結びつく終わりのない修行として実践されることもあるが、もう一方で、ここには同時にイデオロギーが発生する可能性があることも見逃してはならない。

このように考えれば、「絶対者」「絶対無分節」「一なるもの」をめぐる形而上学的問題が、その問題の性質上、必然的にイデオロギーを生み出すことは、筆者の独りよがりではなく、井筒哲学を無理に政治的・社会的なものへ還元するものではないことを示していると思われる。筆者は、このように不可避的に発生するイデオロギーを否認することについて本書で検討したいのではない。そうではなく、不可避的にイデオロギー化された事例が、いかにして成立し、いかなる意義をもつかを考察する。そのような歴史的現実のうちに、東洋人のアイデンティティー、西洋の歴史的支配、東西の関係、伝統とモダニティーをめぐる問題に転じた、あるいはそれらに関わる出来事を取り扱う。

(2) 光

「絶対者」「絶対無分節」「一なるもの」を井筒は「光」と言い換える場合がある。この場合、井筒の念頭にあるのは、スフラワルディー

(Shahāb ad-Dīn Yahya ibn Habash Suhrawardī : 1154-91) とシーア派哲学(とくにモッラー・サドラー)における「光」の理念である。両者に関しては、本論で具体的に言及するので、ここでは、より一般的な観点から、絶対的なものを「光」と呼ぶことの問題点を、他の問題系に関連づけて言及しておく。古代ペルシアでも、イスラーム・ペルシアでも、さらには現代イランにおける伝統的哲学でも、「光」は、①「意識」や「認識」がもたらされていること、② 神のような「絶対的な者の存在」、③ 天使やイマームのような「人間を導く存在」の三者を意味する。これらは、伝統的な哲学や論理的分析によって認識されるものではなく、体験において得られるとされてきた。「光」は、体験内容を表す比喻やメタファーのような形象表現ではなく、体験そのものである。とはいえ、物理学的に計測され、数値化される光ではない。前反省的、前科学的経験そのものが、いわば内側から「あきらかに」非概念的に認識されているまったき意識状態とでもいうべき位相のことである。すなわち、「光」としての体験は、宗教的意識にとって神であったり、神が遣わす天使であったり、神の意志を一般の人間に伝えるイマームというイメージへ転化する。

「光」が「意識」や「認識」という精神体験の意味である場合、体験を反省作用により論理的概念で再構成し分析する意識が意味されているのではない。そのような「光」としての体験が「意識」と区別されていない状態、いわば純粹意識のような状態を「光」と呼んでいるのであるから、光という表現は、体験自体であって比喻ではない。反省作用により論理的概念で再構成し分析することは、言語的分節の作用そのものだから、「光」は体験と意識の区別以前という意味で、「絶対者」「絶対無分節」「一なるもの」と同義であることが、井筒や井筒が参照する思想家、哲学者たちの共通理解であると考えられる。なぜ本源的な体験自体としての「意識」や「認識」が「光」として現れ、他の体験ではないのかという問題、現れ自体が「光」そのものとして捉えられるべき根拠とは何かについては検討せず、本書では「光」をめぐる言説がイデオロギーへと転じていく事例を考察する。

(3) 内面／外面

井筒における内面と外面という区別は、本論で言及するように、明らかにシーア派哲学に由来するものである。この区別や表現方法は、実在や体験を実体化し対象化するという理解になりやすいだろう。そこで、井筒の考えを整理しておきたい。シーア派哲学に従う井筒において、内面には二つの意味がある。一つは形而上に関わる問題であり、もう一つは反政治的な問題である。形而上学的意味は、さらに二つの問題に分けられ、外面にも三つの意味がある。以下で、それぞれについて井筒の意図を明らかにしておく。

形而上学に関わる問題の一つは一者の顕現に関わる。つまり、無分節としての絶対者、多性へ展開すべき一者とその顕現を意味する。したがって、内面とはいえ、これは顕現という動きを意味するから、顕現されたものと区別しがたい動きであることはいうまでもない。内面から外面への動きを意味する。一者は、具体的にいうならイスラーム文化の脈絡ではもちろん「神」を意味する。しかし、この「内面」を構造的実体やモデルとして捉えることは、原義を不当に実体化することになる。ここで「内面」とされているのは、「多性へ展開すべき一者」という観点からも理解できるように、顕現や分節や多様化の動きそのものを指している。ただ、多様化の根拠を意味するので、その動き自体は、分析や反省が成立する以前、ないしは潜在的な段階であるので、その意味で「内面」というのである。「内面」は上で言及した「光」のことを意味する場合もある。

形而上学のもう一つの意味は、存在者から絶対者、一者、神への動きである。これを、井筒もコルバンも、シーア派哲学における独特の解釈学的行為（タアウィール）、すなわち、顕現されたものを非顕現という本源的な状態へと還元することと見なしている。この動きは、顕現されていない意味を理解する解釈行為、いわば外面から内面へという動きであり、隠されたものへの遡源であるので、これも内面という言葉で意味されている。

内面の第二の意味は「反政治的なもの」である。「神的なもの」は社会的なものに対立する。この、あくまで超歴史的で社会的なものに還元

できない側面が宗教の本質として見なされている。もし、社会的なものに「神的なもの」を還元すれば、それは宗教の世俗化であり、「聖なるもの」の排除である。このことは、井筒の比較哲学の基礎と折り合いが悪い。

外面の一つの意味は、絶対者の顕現における最後の段階、すなわち形而下の次元という意味、あるいは、上述の「光」に対立するので、「闇」とされるが、これも上述のように比喻ではなく、体験自体である。物質がこのように体験されているといえるであろう。より正確には、対象化され実体視された世界経験が「闇」と言われている、と考えるべきであろう。これが意味するのは、顕現という動きの終着点であり、ここに留まる場合は、体験、現実、あるいは実在を運動として捉えず、生き生きとした現実を体験しておらず、逆に体験を対象化し、実体化し、固定化している、という観点である。「固体」として捉えられた「物質」という顕現の最終地点は、そのように体験されている。ただし、内面のもう一つの意味にあるように、この実体化する思惟は、本源性へ還元されなければならない。

外面のもう一つの意味は、政治的・社会的な意味である。これは、「神的なもの」「聖なるもの」に対立する「世俗的なもの」である。この場合、神権政治も、もはや「神的なもの」「聖なるもの」ではなく、「世俗的なもの」である。なぜなら、一つには、シーア派哲学において非世俗的権能は、イマームの顕現による独特の解釈学的行為（タアウィール）が現実化すること、言い換えれば、顕現されたものを非顕現という本源的な状態へと還元しつつ体験すること、体験を実体化しないことの意味である。そのような行為を可能にする社会を実現することが、イマームの顕現とされる。イマームの顕現は、政治的状态の変化ではあっても、非顕現の動きを顕現させ実体化しないという意味で、「神的なもの」「聖なるもの」、すなわち「非世俗的」なのである。

さらに三つ目は、井筒にとって「内面」は精神体験によっても達成されるが、外面とする法律的なものは、法学者を媒介として到達できる。これが意味するのは、法学という社会制度的な媒介が前提されていることである。社会制度的な、すなわち、世俗的な機構として実体化したものが、非世俗的なものとされる非実体的なものを間接的に指し示す状態

に置かれていることが、ここでは「外面」とされている。もし、井筒が「外面」を否定的にとらえ、「内面」のイスラームを求めるならば、制度化された法学者による統治ではなく「法学者なきイスラーム」を理想とすると言えるだろう。というのも、制度化された法学者の社会は井筒にとり「外面への道」であり、彼は神秘主義を「内面への道」として非実体的に現実を認識する精神的な在り方や行為を重要視するからである。

したがって、井筒にとっての内面と外面という区分（本論では、井筒の表現に従い、A領域・B領域、上下関係のモデルも用いる）は、決して、階層関係や構造モデルとして理解されるべきではない。井筒も述べるように、これは、一つの現実、あるいは体験をどのように見るかという観点の問題である。実在そのものとしての絶対者が、どのような局面を見せるかということだ。井筒は、非顕現、潜在性に注目する。それを、理解しやすいように、場合によっては、階層的に、あるいは、内外のように、モデル化する。したがって、井筒の意図においては、これは、境界が存在して「上と下」、「内と外」に実在が実体的に分かれることが意味されてはいない。現実のアクチュアルな働きは、実体化されて認識されることもあれば、その本来の動きが非実体的に意識に与えられることもあるという立場の表明であり、それを理解しやすいように、井筒は図式化している。

しかし、この図式化は反省に基づくものであるのだから、概念による対象化を免れえない。また、対象化しないためには、実在について際限なく語り続けざるをえない。だが、際限なく語り続けることは、しかし、「内面」の獲得・維持とは別の事柄である。にもかかわらず、コルバンも井筒も、非実体化や非対象化に際限なく入り込み続ける。この固執は、非実体化や非対象化を対象とする仕組みに、入り込んでしまっているといえないだろうか。この態度は、イデオロギーを発生させるであろう。本書は、井筒がどのようなイデオロギーにどのように結びついてあるかを検討する。

(4) 創造的想像力

絶対者は形態をもたないし、実体化されえないので、どのような像（井筒は、イマージュという言い方を好む）としても表象されえない。しか

し、人間は、絶対者を無分節の状態では、認識できない。それゆえ、無分節状態を認識するには、存在者として多様化し実体化することとは異なる手段で、認識を成立させねばならない。そのような認識を成立させるものが、創造的想像力（井筒はこれを非顕現と顕現の中間の領域という意味で、M領域とする）である。人間は、あたかも光が視覚にヴィジョンを与えているように見えて、光もヴィジョンも物質ではない。しかし、それは、実在ではある。夢が観させるヴィジョンは、実在性がありながら、しかし、現実ではないが、創造的想像力が与えるヴィジョンは、実在そのものでありながら、物質ではない。しかも、実体化する思惟でもない。このような与え方を成立させ、現れ方を可能にするものが、創造的想像力であり、これが、実体化も対象化も回避しながら、実在性そのものを与える。したがって、偶像化されてはならない絶対者を実在性そのものとして認識させるものが創造的想像力である。

だが、創造的想像力の必然的な顕現作用は、非偶像的な像化である。つまり、非質料的で、なおかつ論理的概念による分類、カテゴリーとは全く異なる像を与えることで、概念による固定化（概念の実体化・偶像化）さえ生起させないようにして、実在性を人間の認識に与える。それが、例えば、上でも述べた井筒の表現に従うなら「天使」や「イマーム」という形象である。これらは、概念的な、あるいは論理的な関係性からは乖離しており、その意味で言語的な分節機能の支配も影響も逃れている。しかし、ある種の元型として機能して、ある種の性質や傾向の方向性を決定づけている。これは、カテゴリーとは異なる分類による、イメージ（井筒ではイマージュ）の分類といえる。実在を、言語的概念で分節して認識するのではなく、イメージによって認識することである。したがって、この意味でも、絶対者を反省作用によって概念化させることが回避されている。

ただ、このようにしてイメージが成立しているということは、絶対の段階ではなく、多様化に入った段階、顕現の段階である。ただ、重要なことは、顕現や多様化とは、最終的には、言語的分節化であるにもかかわらず、創造的想像力による像化は、言語的分節とは異なる多様化であることだ。言語的分節化は、概念の論理関係に直結する。しかし、非偶像的な、つまり実体化のできない像としての元型として多様化し顕現の

段階に入った絶対者は、言語的な分節がもたらす概念化とは異なる分節、あるいは顕現の仕方を示していることになる。それゆえ、創造的想像力は、コルバンと井筒において重要視されている。イマームの顕現は、決して制度化されるものではない思考の表れにもかかわらず、イマームに代わる権能は、制度化を実現する。ここでは、創造的想像力が実体化としてアクチュアリティをもたされている。

これらの基礎的枠組みを踏まえ、このような観念が出来てきた事情を考察し、その事態をふまえて、井筒の比較思想について、考察を進めたいと思う。比較思想として提示された井筒哲学の現実化における問題点もまた、これらの基礎的枠組みのはらむ問題系として、検討されるべきである。